

プロジェクトについての現状と将来計画について討議がされた。いくつかの重要と思われる点を整理しておく。

**国際雲気候計画 (ISCCP)**：8年間の C1 および C2 データ解析を1993年12月に終えた。しかし、衛星搭載放射計の検定、上層雲の検知、極域のアルゴリズムなどに問題があることが明らかになった。これらの点を改良したアルゴリズムは1994年7月に開発を終了し、データの再解析が始まろうとしている。1995年末までには再解析が終了する予定である。そこで使われる雲の分類テーブルはより簡潔なものに修正される予定である。今後解決すべき重要な問題点として、INSAT のデータ取得の問題、バリデーション、モデルによる検証などがある。

**第2期国際雲気候計画 (ISCCP-2)**：ISCCP の後継プロジェクトとして1995-2000年の期間のデータ解析を目的とするもので、現在、計画書の作成段階にある。ISCCP に比べて改良する点として次のようなものがある。6.7ミクロンや CO<sub>2</sub> スライシング法を利用した上層雲の統計の改善。1.6ミクロン、3.7ミクロンおよび IR のスプリットウィンドウチャンネルを利用した雲水量、雲粒径および雲相の統計の追加、SSM/T2 などのマイクロウェーブセンサーを利用した雲水量の統計の追加など。

**地表面放射収支気候計画 (SRB Climatology project)**：第3回の SRB/SWG 会議において、Pinker アルゴリズムが GEWEX/SRB の短波長用正式アルゴリズムとして、また、Gupta アルゴリズムが暫定的な長波長アルゴリズムとして採用された。予備的な短波長放射収支の解析結果は、1985-1988年の期間について処理され CD-ROM 化されている。今後、GEWEX のために1983中から1994中までが解析される予定である。

1994年1月に打ち上げられた放射収支計 ScaRab の解析結果が出るようになり、1990年以降途絶えていた走査型放射収支計のデータが再び収集され始めた。将来は、ERBE を改良した CERES が TRMM 衛星や EOS-AM1 衛星に搭載され、より精度の高いデータセットが作られる予定である。

**全球基準放射ネットワーク計画 (Global Baseline Surface Radiation Network project)**：地表での放射収支を1~2%の精度で測定するために、WCRP では高精度の短波長、長波長放射計による測定点をネットワーク化しようとしている。すでにデータを1992年から収集している7点を含めて、現在27点が準備、もしくは稼働し始めた。日本の担当ステーションは、館野と南極昭和基地である。

---

## 1995年度春季大会スペシャル・セッションのご案内

### 「大陸スケールのエネルギー・水循環と陸面過程」

#### 趣旨

気候システムの年々変動の機構においては、ENSO に代表される大気・海洋相互作用と共に、水循環や生物圏を介した、大陸スケールでの大気・陸面相互作用が現在注目されている。特に、ユーラシア大陸での陸面過程とアジアモンスーンの変動との関係などは、古くから指摘されているにもかかわらず、観測、理論を

含め、未解明な部分が多い。現在日本を中心として立ち上げられつつある GAME (アジアモンスーンエネルギー・水循環研究観測計画) は、これらの問題を含めた、大陸スケールでの大気・陸面相互作用の総合的な解明をめざしている。このスペシャル・セッションでは、観測、解析、モデリングを問わず、さまざまな視点からこの問題に関連する話題を集め、今後の研究の方向を見定めたい。

世話人代表 安成哲三